

NPO 法人コスモ夢舞台

# フクロウだよ!

Vol.10

第3号



2019年7月25日

## <事務局から>

7月も半ばを過ぎ、梅雨明けも間近、本格的な夏空の気配がせまってまいりました。皆さまにはますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

豊実では、「第1回奥阿賀国際アートフェスタ」が6月30日に無事終了し、森林と水辺の会場を中心に、約30点の作品が彩り鮮やかに飾られました。

今回のイベントは、新潟県文化振興財団の助成事業として認められ、さらにE.U・ジャパンフェスト日本委員会のご支援により、お陰さまで記録集（同封のA4版全4色8頁の冊子をご高覧下さい）としてまとめることができました。

一方、一段落する暇もなく、ウーファーや中国からの来訪者、ワーキングホリデーの若者の逗留と和彩館ではマキ子さんの大忙しが続いているようです。そんななかで、佐藤さんは早くも「アート展」の制作活動に入っていると、HPは伝えています。

第16回目となる今年の「里山アート展」の会期は9月28（土）～10月19（土）となっています。こちらは、日本芸術文化振興基金の助成事業として引き続きご支援をいただいております。こちらも、会期中に配布する図録作成のため、作品の制作・設置を8月末までには終了したいと思います。

暑い最中となりますが、皆さまの作品参加も、今年は早めに現地の佐藤さん、東京ブロック事務局とスケジュールの調整をお願いいたします。  
（森絢一）

## <直近のイベント予定>

- 里山アート展作品づくり ①案 2019年8月19（月）～23（金）の間  
②案 2019年8月26（月）～30（金）の間
- 第16回「里山アート展」 2019年9月28日（土）～10月19日（土）
- 田んぼ夢舞台祭り 2019年9月28日（土）13:00～  
(アート展オープニングイベント)
- 「里山アート展」美術鑑賞 2019年9月29日（日）9:00～12:00  
(アート展会場と展示館)
- 「里山アート展」撤収作業 2019年10月19日（土）15:00～
- シンポジウム（&交流会） 2019年10月20日（日）9:00～13:00

2019. 7. 26.

こんな田舎に。

佐藤賢太郎。

新潟県でも一、二番を競う過疎地豊実ですが、そこにどうゆう訳か外国人のウーファーやふるさとワーキングホリデーの若者が集まります。その考えも少しばかります。

でも、なぜ集まるのか？ 多くの方はその答えが分かりません、どうしてなのかと思ってしまいます。

今いるワーホリの大学生も不思議がっていますが、彼なりに答えを見つけていました。

言うまでもなく、中心にいるのはわたしと家内です。しかし、コスモ夢舞台の有難い仲間があって今日に至っております。私たちは気が付けば高齢者になっていました。なにも無いところに、あるもので新しい価値を見出す。関東で人と出会い、学び、今日の実践に至っています。

第16回里山アート展は今年も開催しますが、ある素材でアートにしてゆくことにしています。3点できました。作品の準備は私がやります。

ところで、外国人が多く集まるので、国際アートフェスタを開催しました。その結果を記録集としてまとめました。会員の皆様にお届けします。



文化ふっと新潟!

第34回国民文化祭・にいがた2019、  
第19回全国障害者芸術・文化祭にいがた大会応援事業

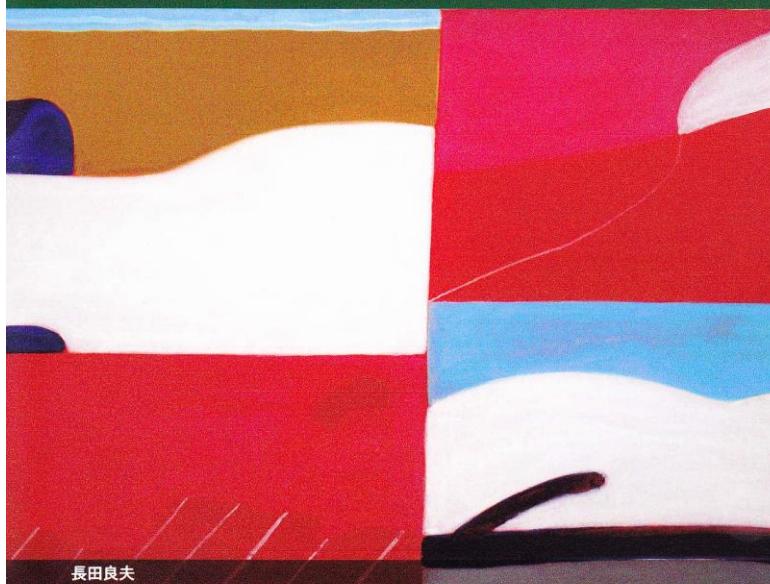
# 第1回 奥阿賀国際アートフェスタ

記録集

OKUAGA INTERNATIONAL ART FESTA

外国人と日本人の作家が感じた豊実。  
生活から生み出す作品。  
無から生み出す創造性。

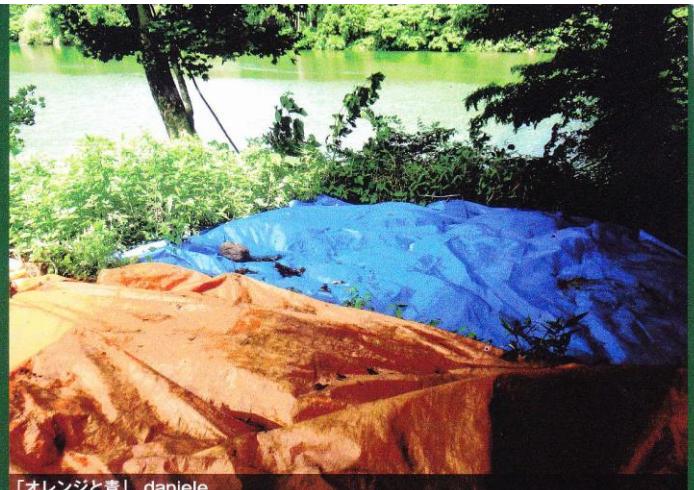
## 第1回奥阿賀アートフェスタ【作品一覧】



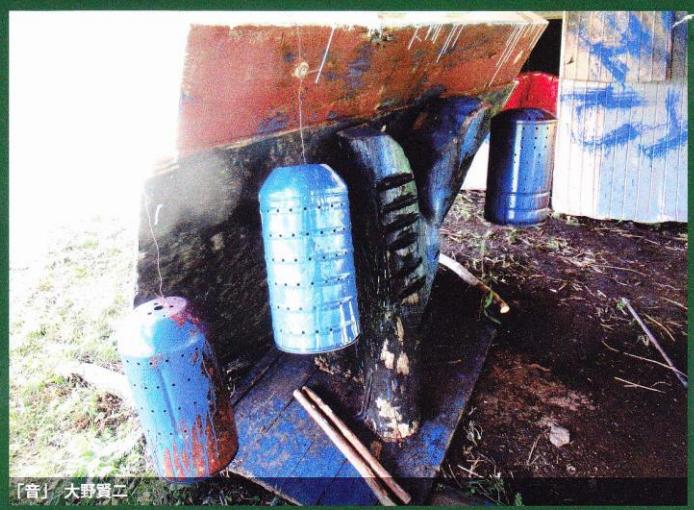
長田良夫



「怒」 佐藤賢太郎



「オレンジと青」 danièle



「音」 大野健二



「スペース」 佐藤賢太郎

### 第1回奥阿賀国際アートフェスタについて

佐藤賢太郎



阿賀町豊実は、新潟県で一番人口減少の大きい過疎地であり、若者がいないところです。私はここを魅力ある地域にすることに興味をもっておりまます。

過疎は阿賀町だけでなく、日本全体の課題と言つてよいぐらいです。しかしその実現には、長い時間がかかり、大変困難なことがあります。この夢の実現に、既に20年以上かかっています。

新潟県人、いや阿賀町の人でさえ豊実を知らない、その過疎地に最近外国人が来るのです。自ら調べて、この地に来たいと希望しています。外国人が我が家に来はじめて今年で5年目になります。

私は長い間、彫刻家として活動してきました。(今もしています)10年前から郷里豊実で暮らしています。そしてこの大自然を舞台に、自由なアートの創作活動を続けています。

そこで、この外国人を中心に、日本人との違いについて考えてみよう。シンポジウムでは異なる考え方や同じ価値観などを、お互いに意見交換してみようと思いました。

それが、奥阿賀国際アートフェスタの開催ということになったわけです。

プレオープンは、危険を伴いながら杉林の森林で行いました。6月8日付けの新潟日報に「大自然をアトリエに」と大きく掲載されました。素晴らしい見出しありました。これだと思いました。

本番のオープニングセレモニーは阿賀野川をまたぐ船渡大橋の岸辺で行いました。船を浮かべるところから始めました。船を浮かべると川からは絶景です。豊実は過疎といわれますが、過疎ではないのです。それどころか、魅力が一杯あります。

船を岸に着け、作品を作るワークショップを説明し、アメリカ人の女性2人に絵を描かせると、とても楽しそうに描いていました。上手いとか下手とかという意識を取り払い、アートを楽しむことを示しました。周囲を囲む方々もとても楽しそうでした。

その後、シンポジウムを行いました。参加者の中にはこれまでの進行を見てか、これこそアートではないかと感想を述べる方もおりました。アートを楽しむことが参加者の中に広がったようです。

国際アートフェスタも魅力をつくりだすことが面白くて、楽しいのです。

## 第1回奥阿賀アートフェスタ 概要

[会期] 2019年5月20日(月)~6月30日(日) (公開制作期間)  
[会場] 新潟県東蒲原郡阿賀町豊実(とよみ)船渡地区(川辺、森林、畑)  
[イベント] 「オープニングセレモニー」 / 6月15日(土)午後1時▶午後2時  
「シンポジウム」会場:和彩館 / 6月15日(日)午後2時30分▶午後4時30分



「Aの並び」 stecie.spenser



「閃き」 佐藤賢太郎



「再生」 anais,sarah



「あるがままに」 佐藤賢太郎



「竹」 大塚秀夫

## 第1回奥阿賀国際アートフェスタにて

株式会社 博進堂 清水 伸

風が吹く中、オープニングセレモニーに参加しました。和彩館に着くなり、手作りの昼食、笹に包まれた押し寿司とみそ汁を頂きました。佐藤賢太郎さんの奥様マキ子さんの美味しい奥阿賀ならではのおもてなしの作品です。感激しました。オープニングは川下りをするのやら、ライフジャケットが必要とか訳のわからぬことを皆が話していました。司会者の大塚さんは最初センスのいいネクタイにジャケットを羽織っていましたが、オープニングの時にはいつのまにかジャージ姿になっておりました。

私は、オープニングは普通にセレモニーと考えておりましたが、この辺からすでに国際アートフェスタにふさわしい世の中にならぬようなオープニングの始まりでした。奥阿賀の学校で英語を教えているというアメリカの女性教師の方お二人も参加しており、



あちらこちらに自由に大胆にペインティングするというワークショップも佐藤賢太郎さんが率先して参加者やヤギと一緒に始まりました。こういうのが楽しいんですね。楽しいかどうか、おもしろいかどうかアートは束縛されずに自由に創造することが、人間を殻から解放し、新しい世界へと導いてくれるのだとこの場から感じました。その後も参加者の皆さんと一緒にシンポジウムを行いましたが、何よりもこの楽しい場をみんなで創り上げていることに感心しました。場そのものもまさに皆さんと共に創る見事な作品でした。



## ■ Art Eniko (Hhanngarian)

1.Art: Today is 24th of June 2019. A rainy day in Toyomi when I have finished my second painting under the nearby bridge. It's a very nice experience to do artwork in Nature. My first painting was about practicing and learning about Japanese calligraphy. I think there is no better way to learn these beautiful characters than painting them. So I took the recycled table and firstly painted it completely white. Then I grabbed the black colour and started to paint Hiragana. More precisely, the character 'nu' and 'ya'. I think they looked pretty good and made a nice Hiragana table. 😊

My second painting was again, a recycled table. I had different plans with this huge 'canvas'. I love Nature, especially mountains and forests. As I wanted to use only 2 colours, black and white I thought I paint my favourite landscape in a Japanese style. (At least I tried.) Huge mountains with snowy peaks and snowfall. I just have this feeling to paint mountains, characters that have some deeper meaning and just generally to create something that makes you feel calm and close to Nature. I think these arts are magical.

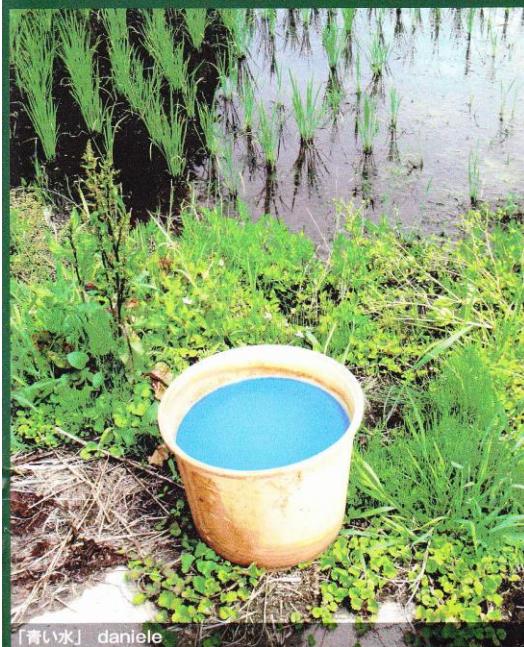
## ■ 大自然を舞台に 森 紘一

JR磐越西線の豊実駅に近い阿賀野川をまたぐ船渡大橋の川辺は、雨上がりの山と田んぼの緑に包まれて、静寂な空気が流れている。6月15日（土）の昼下がり、ここでオープニングセレモニーがはじまるという。

東京ブロックからは大野さん、大塚さん、時崎さん、御沓さんとわたし、新潟ブロックからは博進堂の清水さん、郡山の大島さん、長谷川さんと小宮さんが参集した。

どんなシナリオが用意されているのか、進行役の大塚さんも充分呑み込んでいるわけではなかったようだ。ともかく、「第1回奥阿賀国際アートフェスタ」のオープニングセレモニー開始が大塚さんから発せられて、舞台は幕を開けた。

ライフジャケットを着けた佐藤さんのパフォーマンスは、ボートに乗って岸辺に辿り着き、大木に括りつけられた脚立の桟橋を上って会場に現れるところからはじまった。広場には、ピアノの鍵盤や廃材などを工夫した作品が田んぼに向かって並んでいて、何故かそこに、子ヤギも野草を食しながら参加していた。“コロンちゃん”と名付けら



「青い水」 danielle



「山」 eniko



「青い人」 森 緑一



「組立」 渡辺美紀

れた子ヤギの「めえー」という鳴き声はあたりの風景にも溶け込んで響き、いつそう長閑だった。

佐藤さんの演出は、担当者がキーボードをたたくとプロ作家（長田良夫さん）の色鮮やかな絵画作品の幕が外され、さらに別の人気が叩くドラの音に合わせて、佐藤さんが楽しそうに作品群にペイントを始めるという流れだつた。これに倣って、はじめはためらいがちだった参加者の子連れと若いアメリカ人の二人も、次第にワークショップに夢中になって作品を彩つていった。

実は今回のイベントは、5月20日～6月30日と開催期間が長い。そこで、イベント会場を森林と川辺に分けている。5月30日（木）には、廃材のドアや消火器、ガスコンロなどを組み合わせた作品20点の置かれた森林会場で、プレオープニングイベントとしてスウェーデンなど外国の参加者も着色作業などを楽しんでいた。

こうして大自然をアトリエに、パフォーマンス・アートの醍醐味を味わっていたわけである。

この後、会場を和彩館前の展示館会議室に移して、シンポジウムが開かれた。子どもをふくむ14名の皆さんが出発された。

今回のイベントに参加した感想は、皆さん「楽しかった」だが、それぞれに実感がこもっていた。

一つひとつの作品づくりだけでなく、皆さんのが参加してこうしたイベントを開催できること自体がアートですね」という意見や、「久しぶりに、ゆっくりと寛ぐことができました」という感想もありました。

最後に、日本人と外国人の違いに触れて佐藤さんは、「生活習慣や文化の違いはあるが、皆で渡れば怖くない式の慎重な人が日本人には多い。アートを楽しむことで、自分の人生をより豊かに生きるメンタリティーを養つてもらえればありがたい」といったニュアンスでコメントされていた。

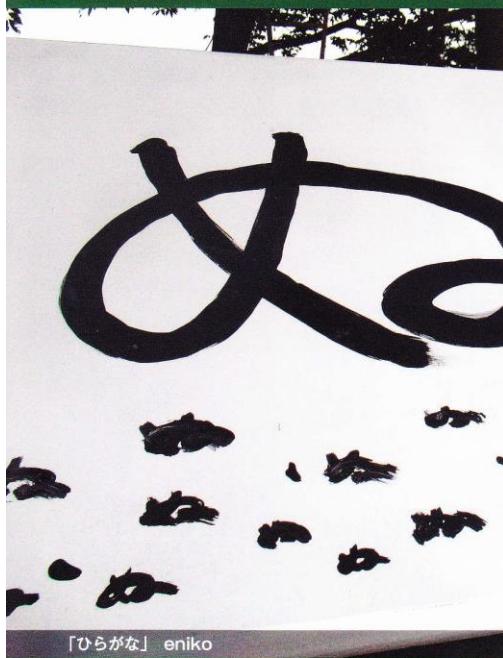
この先、「奥阿賀国際アートフェスタ」が回を重ねることで、「里山アート展」との相乗効果も上がって来るに違いない。ともあれ我われも、元気に参加し続けたいものである。



「透けて見える」 清水 伸



「私たち」 clemence.zoe



「ひらがな」 eniko



「重ね」 Anna

アートフェスタを開催

大塚秀夫

イベントを動かすことは大きなエネルギーが必要。

佐藤さんは嬉々として動いています。

私もアートつくりに埼玉から参加しました。

森林を整備。水辺の草刈をするため参加。みんなが集まつくる。

予算や人材が豊富にあるわけではない。空き家もリフォーム。

お金をできるだけかけずにゲスト館としてオープン。ここに宿泊して作品を作った。豊実駅前通りはアートが彩りを添えています。

山にも手作りの風呂がありますが、ゲスト館の風呂も快適。

佐藤さんを見ていると生きることへのすばらしさ。

過疎を希望に変えていく力。生きることを楽しんでいる。

日常生活がブログで紹介されていますが世界各地から外国人が訪れます。なぜ、奥阿賀を選ぶのか。彼女たちの意識がコスモ夢舞台の活動に共感するからであります。

佐藤さんの燃え尽きることのない情熱。それが活動を推進しています。

森林、水辺、畑には数多の作品が生み出されています。

空間のなかで様々なアートが展開されている。

ヤギの『コロン』の小屋も作品になる。ヤギは高い所にあがります。その遊び場も作品です。参加した人は筆をとり、自由にペイントすることをワークショップで楽しんでいました。

独自の視点から人間存在の確かさを表現する。

自然は客観的な存在ではなく、自然と自分の中の意識が組み合せられ造形が光を帯びる。自分の中の意識が表現することにより命が吹き込まれる。その組み合わせによって、面白い。それを発見するのが楽しい。

絵だと私にはこのようにはいかない。私は絵が下手だからという意識が先に来てしまう。

外国の人は小屋に絵を描き、壁に絵を描く。それがみんなすばらしい。

与えられた条件の中で自由に創る。抽象性が森林、川辺、自然の中で溶け合っている。佐藤さんはこの直観が優れている。

物の真相を見破り、統一的なあるものをなして行く力。

物の根底にあるもの、背後にある我われの理想をあらわしたるアーティストである。

アートで環境を変えていく。環境アーティスト、アースダイバーアーティストだ。



「鳥」 矢野満里子



「エニクー」 enikō



「赤い巣」 吉田麻希



「屏風」 佐藤賢太郎

## 横並びの発想と自分としての考え方

## 御沓一敏

新潟県で一番人口減少の大きい過疎地・豊実での「奥阿賀国際アートフェスタ・オープニングセレモニー」に参加して感じたことを述べてみる。

新聞にあれだけ大きく、内容のある記事を掲載していただいたにもかかわらず、参加者は依然として少ない。数の問題ではないと思っては来たが少々気になる。

ところで、豊実を訪れるウーファーはすでに50名をはるかに超えたという。何故なのだろう。そのヒントがスウェーデン人のAnnaさんの投稿文の中にあるような気がする。

最初にウーファーとしてコスモ夢舞台を選んだ基準としての自分の考えをはつきりと示している。

1.山と森に囲まれた小さな場所

2.ベジタリアンのホスト(私は主にベジタリアンフードを食べていて、日本のベジタリアンフードがどんなものか知りたいと思った)

3.年配のカップル/家族(私は生まれる前の日本の様子、そして変化したこと興味がある)

4.米作りの場(米の作り方や田んぼでの仕事が本当にやりたかった)

5.農業の経験があまりない人を受け入れるホスト

長い間検索した結果、私の願いをすべて満たす1つのホストが見つかりました。とある。

これは「隣の家が種を蒔いたから自分の家も同じように種を蒔く」という横並び社会の発想とは大きく違う自分としての考えに基づく生き方である。

オープニングセレモニーのワークショップのこと。アメリカの二人の若い女性が作品にペイントすることを躊躇っていた。アートはうまい下手ではない。自由に振舞うことこそ大切と言われ、参加して続けているうちに笑顔になって楽しんでいた光景が印象的であった。

日本人の多くに見られる横並び社会的発想は気候風土環境のなせる業であり、良い悪いの問題ではないのかもしれないが、残された人生の時間が少なくなってきた今、どちらを選ぶかは自分が決めることである。

## 第一回奥阿賀国際アートフェスタを終えて

佐藤賢太郎

1. 海外の制作者を集めることが難しかった。一番多く集まる日をオープニングにしたが、来ると言いながらキャンセルとなってしまうケースがあった。

2. 会期を長く設定したが、それは制作する海外の方を集める都合である。

3. 数名の国内の作家を選んで集めた。見学者は少ないものの、アートを考える機会になった。

4. 国際アートフェスタを過疎で行いましたが、関心をもつ方もいたが少なかったと思う。

5. あるものでこれだけできる。創造することで、できます。そのことがとても楽しい。図録を見ていただければ、お分かりいただけると思います。

6. “苦難の時代をどう生きる？ 捨て身になって、ただ積極的な行動に出れば、それが大自然の行動であるが故に、人知を超えてできるはずです”この様な文章と出会い、勇気をいただきました。

7. 開催場所、考えも斬新に、第二回開催にむけ挑戦します。



●主 催：NPO法人コスマ夢舞台

●後 援：新潟県新潟地域振興局／阿賀町  
EU・ジャパンフェスト日本委員会  
公益財団法人  
新潟県文化振興財团助成事業

●発 行：2019年7月25日

●発行人：佐藤賢太郎

●発行所：NPO法人 コスマ夢舞台  
〒959-4304 新潟県東蒲原郡阿賀町豊実乙1036  
TEL/FAX 0254-96-2003

●編 集：佐藤賢太郎

●印 刷：株式会社博進堂

<http://www.cosmoyume.net/>

## M A P



AGAMACHI  
TOYOMI  
FUNATO